自然讃歌

タンポポ異変

妹尾　治人

タンポポ（蒲公英）は桜と同時に咲き始めて春の野原を彩り、花が終わるとやがて白い羽毛を付けた種子に変わり、晴天の午後そよ風に乗って、沢山の兄弟が落下傘の如く舞い上がって行く。子供の頃、羽毛の付いたタンポポを何本も取ってフーウと吹いて遊んだことを思い出す。

ところで、よく見るとタンポポに異変が起こっている。廿日市の市街地を歩いて目に付くタンポポは、ヨーロッパ原産の外来種で、日本在来のタンポポはほとんど見られなくなった。市街地を離れて原の川末に行くと、日本産が僅かながら残っている。この地域でも外来のものが、在来のものより遥かに多い。

日本種と外来種の見分け方は、総苞片が反り返るのが外来、反り返らないのが日本種である。

市街地ではもう在来種を見ることは出来ないと半ばあきらめていた。ところが、今年の春、天神山の麓の瀬良商店（当会会員）の正蓮寺側裏庭の生垣の下で、白花タンポポ一株を発見した。まさに幻のもので、よく残っていてくれたものと嬉しくなり、しばらく観察させてもらった。タンポポは宿根草であり、市街地でもよく探せば垣根の下など、人目の触れないところに生き残りがあるものと思われる。

西洋タンポポは、明治時代に札幌農学校のブルックス教師が食用にする為に、日本に持ち込んだのが始まりで、これが南下して昭和の初め東京まで、現在は九州まで広がってる。

日本のタンポポが西洋タンポポに追いやられ、姿を消している現象を西洋タンポポの日本侵略と考え、タンポポ戦争という言葉が生まれている。これは、自然環境のバロメーターで、排気ガスにも強くどこでも生活できる西洋タンポポは繁殖力も強く、春だけでなく年中花を咲かせ、種子を飛ばせているのだから、日本種が勝てるわけがない。

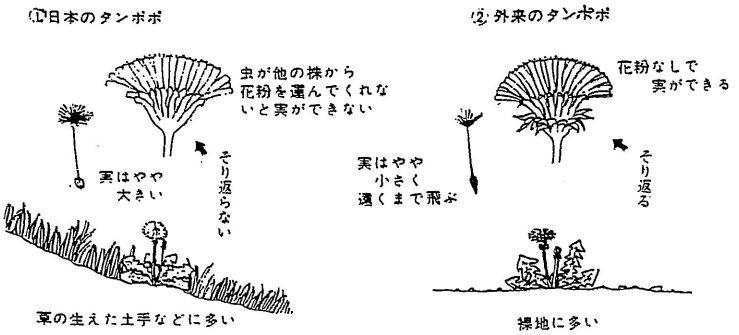
タンポポは、洋種も日本種も山菜として利用される。若葉は、サラダ・おひたし・油いため、根は、乾燥して粉にしてコーヒーの代用にするが、根も葉も苦いので、苦味健胃剤と考えるのがよさそうである。

タンポポはどこを切っても白い乳液が出る。これが苦みの要素で、これを程よく抜かないと苦くて食べづらい。

タンポポの名は辞書には鼓草とあり、鼓の音「タン・ポンポン」から付けられたらしい。どこが鼓草なのか長い間疑問に思っていたところ、花の軸をストロー状にして両端に縦四つつに切れ目を入れ、これを水に浸けると反り返って鼓のように見える。これで納得、植物の名前の由来を調べてみるのも面白い。

近年、西洋タンポポばかり目に付くようになったが、これは自然環境が悪くなった為である。日本の春の風物詩であるタンポポ、スミレ、レンゲ草の咲く、自然度の高い豊かな環境をいつまでも護ってやりたいものである。

そよ風に　乗ってたんぽぽ　空に舞

自然観察指導員

タンポポを見分けるポイント